

# 秋月禅学と私(2)

「即今・此処・自己」の真実

竹村 牧男

人の死に際して、よく断末魔の苦しみということが言われる。しかしこの言葉は正しくない。正しくは、断末摩の苦しみである。末摩とは、サンスクリットのマルマンの音写で、体中に400～500あるというツボのようなものごとである。人が死ぬとき、それが断割されることがあるという。その非常な苦しみが断末摩の苦しみなのであり、けっして断末時に魔がやってくるというようなことではない。

第一、仏教では死を断末とは見ていない。人は死んでも存続して、輪廻していくと説いている。その説明には、2種類あるかと思う。一つは、四有の説である。生まれた刹那を生有という。その後の一生涯を、本有という。死の刹那を死有という。その後、次の世にどこかに生まれる間を、中有という。こうしてまた生有を迎え、その後の有が続いていくというのである。

死に際しては、光に出会うともいう。しかしそのことによって救われるわけではない。すでにそれまでの業( = 行為とその未来への影響力)によって、次の世には、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上のどこに生まれるかが決まっており、中有の間ですでにその次の世の生き物のかたちをしているという。しかしその身体は人間の肉眼には見えず、一方、その身体は物理的抵抗をも透過して行きたいところへどこへでも瞬時に行けるともいう。

中有の存在は、最長49日間とされている。少なくともこの間に、業にしたがって次の世に生まれていくというのである。四九日に、満中陰の行事が行われるゆえである。

もう一つの輪廻の説明は、十二縁起説である。これは、無明行識名色六入触受愛取有生老死の12項目の縁起の関係によって、生死輪廻が続いていくと説くものである。今、このことについて詳しく解説するいとまはないが、ただこの説の主旨は、われわれの生死輪廻の苦しみの根本には、無明があるということである。人は誰でも、根源的無知とでもいうべきものを抱えていて、そのために自我に執着し、ものに執着して、その結果、輪廻してやまず、苦しみ続けるという。キリスト教では原罪をいうが、仏教はそこを無明という。仏教は、その無明を破れば、真実を自覚し、生死輪廻は止み、苦しみから解放されるという。

しかしながら、仏教は無我ということを書いてきた。一体、無我なの



竹村 牧男 / たけむら・まきお

1948年、東京生まれ。71年、東京大学文学部卒業。学生時代より秋月龍珉老師に参禅する。文化庁宗務課専門職員、三重大学助教授、筑波大学助教授、同大学教授を経て、現在、東洋大学文学部教授。筑波大学名誉教授。居士号・祖根。著書に、『唯識三性説の研究』、『唯識の探求』、『親鸞と一蓮』、『良寛さまと読む法華経』、『西田幾多郎と仏教』など多数。

に、何が生死輪廻するのだろうか。生死輪廻には、自業自得ということも関係している。自ら作った業によって、その結果を自らに受けるのだという。確かに他者の業を引き受けるようなことになったら、混乱するほかないであろう。しかし、自ら自らにということを保証するものを、無我なのどこに求められるのであろうか。

この問題は、仏教にとって大問題であつたらう。仏教思想史上では、唯識の阿頼耶識の理論によって、この問題は解決に至ったかのようである。阿頼耶識(蔵識)は、意識下の世界であり、刹那刹那、生じては滅し、生じては滅ししながら、無始より無終に相續されているという。そこに行為の情報が蓄えられ、伝達されていって、未来にその影響力が発揮され、生死輪廻が説明されるという。このことも今は詳しく解説するいとまはないが、無我ということと輪廻ということを矛盾無く説明しようとする仏教の努力には大変なものがあり、ついに阿頼耶識の説でひとつの決着を見るに至つたのであつた。

今、述べてきたところからも知られるように、仏教では生死輪廻をどこまでも認めていた。釈尊がこの問題をどう見ていたのか、それは詳しく検討してみるべきだが、おそらく釈尊もこのことを認めたとと思う。善因楽果・悪因苦果の道理を認めない場合は、行為の基準が成り立たず、二ヒリズムに陥りかねないからである。ただし、この場合の善悪は、社会的倫理・道徳上のことではない。あくまでも無明を破るということにかかわる、宗教上のことにほかならない。

このような事情があるにもかかわらず、龍珉は生死輪廻などありえない、死後の世界は存在しないと、はっきり言明した。生死輪廻などいわずとも、仏教は立派に成立するというのである。その主張は、たとえば一世を風靡したその著『誤解だらけの仏教』(柏樹社)に明らかである。その断言は、仏教者としては、破天荒のものでさえあつた。

釈尊は、死後の世界について問われたとき、黙して答えなかつたともいう。また、仏教では、常見と断見とを厳しく戒めている。常見は、

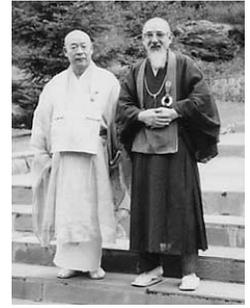
秋月 龍珉 / あきづき・りょうみん

1921年、宮崎市生まれ。東京大学文学部哲学科卒。同大学院修了。

宮田東原老師、古川堯道老師、宇坂光龍老師、大森曹玄老師に参禅。

埼玉医科大学教授、花園大学教授などを歴任。埼玉医科大学名誉教授。臨済正宗真人会師家として門弟を多数養成。月刊誌『大乘禅』主幹を長らく務める。禅道と禅学とを究め、さらに仏教学・宗教哲学の分野にも活躍した。宗教間対話の促進に努め、晩年は海外の国際学会などにも積極的に参加した。1999年、9月示寂。

著書に『秋月龍珉 著書集』全15巻、『道元入門』『公案・実践の禅入門』『新大乘 仏教のポスト・モダン』『禅とイエス・キリスト』(対談集)『世界の禅者 鈴木大拙の生涯』『誤解だらけの仏教』『現代(ポスト・モダン)で生きる仏教』『無心と神の国』(対談集)『絶対無と場所 鈴木禅学と西田哲学』など多数。



秋月龍珉老師(右)と嶋野栄道老師

自分が死後にも存続するという見解、断見は自己は死後には滅尽するという見解である。龍珉の説は、厳しく排除された断見なのではないだろうか。龍珉は外道に陥ったのではないだろうか。

しかし私は思う。龍珉は龍珉の仕方、仏教の見た真実を明かしていたのだと。

常見や断見は、辺見とも辺執見ともいわれる。それは自己を対象的に、常住・単一・主体なるもの(常・一・主・宰)と捉えて、そのうえでそれについて、死後も有るとか死後には無いとかいうものである。生死輪廻があるといわれて、その場合、対象化された自我が続いていくとみなすことがしばしばである。龍珉はそこを問題としていたのである。

大事なことは、真実の自己を自覚することである。真実の自己に自覚めれば、それがどこから来て、どこへ行くかもわかる。死後、どこへ行くかの問題もおのずから解決されるのである。では、真実の自己とは何か。それはまさに、「即今・此处」に生きている自己以外にない。意識の中に描かれた自己でもなく、観念の中に妄想された自己でもなく、まさに「いま・ここ」において働いている自己、それ以外にはないであろう。それは、主体そのものとしての自己ということである。すなわち対象的につかまえることのできないものである。したがって、ただ生きることでしか、その自己とひとつになることはできない。しかしただ生きることの中に、真実の自己は展開する。その自己にとって、死後のことなど、夢想のこと以外の何ものでもないであろう。人はどこから来て、どこへ行くのか。しかしわれわれは、今から今へと生きるものであり、そこをつかめば、生死の問題もかたづくのである。そこでは、道元の言うように、「生也全機現、死也全機現」(\*)ということになる。

こうして、龍珉はその「即今・此处・自己」の真実を直指したかったがゆえに、生死輪廻などありえないと強く説いたのである。その発言は、関山禅師の「わが這裡に生死なし」という言葉と、軌を一にするものであった。

龍珉の代表作のひとつに『公案』の書がある。禅修行上の問題として課せられる公案の中の三十三則をとりあげ、巧妙に解説した貴重な書物である。そのどれもが「即今・此处・自己」のことを語って

いると言ってもさしつかえないが、龍珉が特にこの「即今・此处・自己」を見出しとして付したのは、「瀧山水牯」という次のような公案であった。

「瀧山靈祐禅師は、あるとき弟子たちに言われた、『わしは死んだら、門前の檀家に一頭の水牯牛になって生まれる。そしてその牛の脇の下に「瀧山の僧、靈祐」という五文字を書いておく。このときおまえたちは、この牛を何と呼ぶか?もし瀧山の僧といえば、それは水牯牛だ。水牯牛と呼べば、それは瀧山の僧靈祐だ。まあ、言うてみよ。いったい何と呼べばよいか』。そのとき高弟の仰山がみんなの中から出て、おじぎをして出ていった。」

さあ、その牛を何と呼べばよいのだろうか。龍珉は、「禅の修行は常に『いま・ここ・自己』が問題である。これを忘れると、公案がよそごとになり、せつかくの参禅がむだごとに終わる」と解説している。いくつもの公案体系を深く研究した龍珉は、いつもただひとえに「即今・此处・自己」において、本来、無相の自己が有相・有位にはたらくところを直指し続けたのであった。

(\*) 生きるときは全力でその働き(機)を現し出せ、死ぬときは全力でその働きを現し出せという意味